# “人と人”をつなげるアートイベント ～瀬戸内国際芸術祭2019～

作品づくりに関わった人たちの思いを込めて風になびく、五十嵐靖晃『そらあみ〈島巡り〉』

香川県を中心とした瀬戸内海の島々などを舞台に、3年に一度開かれる『瀬戸内国際芸術祭』。2019年は開催年に当たり、会場周辺では4月26日のスタートを前に準備が進む。作家と地域の人々との協同で作られる芸術祭の開催直前の街を訪ねた。

## 作家と共に編んだ五色の漁網が瀬戸内の海辺に出現

漁網制作のワークショップは熱気を帯びていた。木造の小さな建物に入ると、参加者が五色のスパンナイロン糸を使って網を編んでいる。見守る周りのベテランは、多くが漁網を熟知した地元の漁師たち。身振り手振りを交えながら編み方のレクチャーをしているのは、瀬戸内国際芸術祭に参加する作家・五十嵐靖晃氏だ。

瀬戸内海に面した香川県坂出市北部、陸続きとなっている瀬居島の北端に建つ竹浦公民館で開催された、2019年3月3日のワークショップの一コマだ。地元の人25名と一般参加者15名が五十嵐氏の作品『そらあみ〈島巡り〉』の一部を編む。瀬戸大橋でつながる5島（瀬居島・岩黒島・与島・櫃石島・沙弥島）でワークショップを順次行い、芸術祭（春会期）が始まる頃には、高さ5メートル幅60メートルのそらあみができ上がる。秋会期までには120メートルの長さにまで広げるという。

人と人、島と島、地域と世界とをつなげることが瀬戸内国際芸術祭の開催趣旨の１つだ。香川県高松市から参加した女性は「編んでいるうちに段々と網づくりに慣れてきました。マスターしたこの技術でハンモックでも作ってみたい」と話し、地元の漁師は「複数回来ている参加者も多いので、今日は手伝いの出番がないね」と笑う。地元とそれ以外の人々が共に参加し作り上げると言うこの芸術祭のあり方が、小さな公民館から垣間見えるようだ。

地元とそれ以外の人々が作家と共に“そらあみ”を作り上げていく

作品とワークショップの狙いを「漁網を編むことで人の記憶をつなぎ、網の目を通して瀬戸内海の風景をとらえ直す」と五十嵐氏は語る。「漁師は元々、集まって網を編んでいましたから」と続けた。

参加者たちが思いを込めた赤・青・黄・白・黒の五色の網は、春会期が始まる直前に沙弥島西ノ浜で掲げられる。風になびくその姿が波打ち際に現れたとき、『そらあみ〈島巡り〉』が完成する。

## 島々への玄関口・高松港にもアートの香り

作家と地域の人々が協同する作品づくりは、このあたりでは決して珍しいものではない。芸術祭が近づけば、香川県の島々では似たような光

景をあちこちで目にする。

瀬戸内国際芸術祭は、“美しい自然と人間が交錯し交響してきた瀬戸内の島々に活力を取り戻す”ことなどを目指し“海の復権”をテーマに掲げて、2010年に始まった。3年ごとの開催で、2019年は4回目を迎える。7島1港を舞台にした芸術祭は、2013年以降12島2港へとエリアを広げ、一大イベントとして知られるようになった。

美術作品だけにとどまらない魅力もある。例えば直島を歩くと、日本の現代建築を代表する建物が建ち並ぶさまが目に入る。建築界のノーベル賞と言われる“プリツカー賞”を受賞した安藤忠雄氏設計の地中美術館や、同じく受賞の建築ユニットSANAAが設計した「海の駅『なおしま』」など、ファンを魅了する建築が目白押しだ。「瀬戸内の海と島々が織りなす自然美と、人々を魅了する建築美にあふれる土地柄ゆえ、このあたりにはアートが広がる土壌があったのかもしれません」との声がどこからともなく聞こえてくる。

芸術祭の舞台となる島々へは、主に高松港から出発する。直島、女木島、男木島、小豆島などへ向かうフェリーが入れ替わり入港する拠点の港だ。ここも瀬戸内国際芸術祭の作品が待ち受ける舞台の１つ。旅客ターミナルの周辺では、青空に向かって伸び、港のゲートを彷彿させる一対の塔や、海辺の広場に横たわる木造の巨大な球体などの作品が点在しており、歩いても楽しめる。ここは、島へ渡るその前からアートな気分を盛り上げてくれる場所だった。

## パフォーミングアーツをはじめ200超の作品が集結

2019年の瀬戸内国際芸術祭は、3会期にわたって開催される。4月26日から5月26日までの春（ふれあう春）、7月19日から8月25日までの夏（あつまる夏）、9月28日から11月4日までの秋（ひろがる秋）の3つだ。3月5日現在、213の作品と35のイベントが予定され、参加作家（組）は225を数える。

主な新作として、女木島では複数の“小さなお店”を作品の舞台とするプロジェクトが行われる。実際に動いている洗濯機と内部に洗濯物が回る映像を映している洗濯機とを店内に並べ、虚構と現実が混在する世界を表現した作品など多彩だ。高松港周辺では、古い倉庫群を活用した北浜alleyを中心に香川県の特産品を題材・素材にした現代アートや工芸作品が公開される。

また、直島・豊島・男木島・小豆島・大島・犬島・沙弥島・宇野港周辺でも新作アートが発表される。

過去3回の芸術祭との違いを「アジアとの連携を深くすることやパフォーミングアーツの充実」だと、芸術祭実行委員会事務局の担当者は話す。オランダ人アーティストのクリスティアン・バスティアンスが映像インスタレーションとライブ・パフォーマンスで人間の尊厳を問いかける創作アートなどは、芸術祭開催前から注目を集めている。

『そらあみ〈島巡り〉』のワークショップで聞いた「網づくりは五十嵐氏だけでなく地元漁師の指導が欠かせない。地域ごとに異なる漁師の気質によって編目の大きさや形に違いができる」という言葉を思い出す。作品を通じて人と人とのつながりをじっくり感じてみたい。祭の始まりはもうすぐだ。

協力：瀬戸内国際芸術祭実行委員会事務局

瀬戸内国際芸術祭2019
https://setouchi-artfest.jp

高松港旅客ターミナル近くに置かれた、リン・シュンロン（林舜龍）『国境を越えて・海』

高松港はまさしく瀬戸内東部の島々への玄関口だ

妹島和世＋西沢立衛/SANAA設計の「海の駅『なおしま』」を目当てに来島する建築ファンも多い

やさしい美術プロジェクト「｛つながりの家｝GALLERY15『海のこだま』」（Photo：Yasushi Ichikawa）は大島にある作品

8つの言語の文字が特徴的なジャウメ・プレンサ『男木島の魂』（Photo：Osamu Nakamura）